

ジャガイモと映画（17）

<盗む（2）>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

63 長いお別れ

2019年、邦画。監督：中野量太。

かつて中学校長を務めた東昇平（山崎努）は、友人の通夜の席ににいるのに「何！彼が死んだのか」と聞くほどの認知症を患っている。症状は徐々に進行したため、妻の曜子（松原智恵子）はデイサービスの力も借りて介護を続けている。昇平は家にいるのに「家に帰ろう。」と立ち上がったたり、徘徊に出たりする。このように家族は毎日振り回されるが、暖かく見守り、協力しつつ支えている。しかし、日を重ねるごとに記憶を失い、父でも夫でもなくなっていくことに戸惑う。長女がアメリカから駆けつくと、曜子が網膜剥離となり緊急入院。曜子に代わって下の世話などの苦勞を背負うことになる。続いてついに昇平が同じ病院に入ることになり、一度装着したら死ぬまで離せないと言われる人工呼吸器を付けるか否かの決断に迫られていく…。

別れるまでの7年間、彼との付き合い、アメリカ西海岸に住む姉家族などとの“繋がらないって、切ない”関係にも対処しつつ、おのおのが自分自身を見つめなおして、大切な“別れの時間”だということを気づかせてくれる。「介護」と「認知症」（＝長いお別れ）を題材にし、その何気ない日常の連続を家族物語に昇華させた傑作と評さ



写真1 a 干しぶどう入りポテトサラダ



写真1 b 万引きした昇平の好物3品

れている。

しかし筆者を喜ばすのは、ジャガイモが度々顔を出すこと。まず、次女美美（蒼井優）がポテトサラダに酸味を添えるため干しぶどうを加えたり（写真1 a）、中島京子の原作（文春文庫、2018）には無いスーパーでの万引き事件もある。盗んだのはす

べて昇平の好物であり、娘との思い出にも繋がる(黒痣病菌核が着いたようなひどい)ジャガイモ、旅のお供でもあったボンタンアメ、それに鮭の切り身の3点であった(写真1 b)。さらに、「お父さんの好きなジャガイモだよ」と味見をしてもらおうと調理箸で出すシーンに加え、最後にもう一つ、帯広に行ったモトカレ大畑雄吾から士幌産のジャガイモが1箱送られて来る。

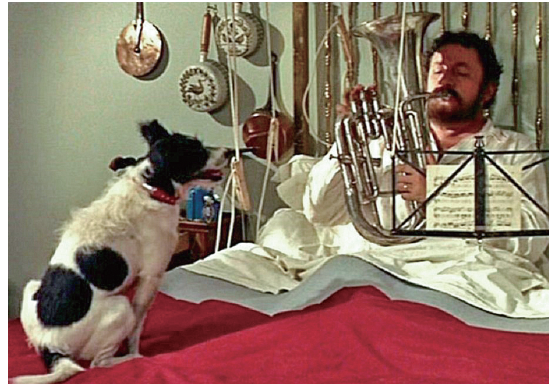


写真2 ジャガイモを掘ってくる犬

64 ぐうたらバンザイ！

(原題：Alexandre Le Bienheureux)

1967年、フランス映画。監督：イヴ・ロベール。

フランスのある田舎町に、働きものの妻とともに慎ましくも幸福に暮らす農夫のアレクサンドル(フィリップ・ノワレ)がいる。この男は大の怠け者であり、仕事よりも寝る・釣る・ビリヤードが好き。これに配する奥さん(フランソワーズ・ブリオン)のほうは美人でしっかり者。朝から彼を叩たたき起こし、指を鳴らし、トランシーバーで彼に命令している。

ある日、親友サンガンのところでジャックラッセル・テリアの仔犬が生まれる。その一匹を貰うのだが、奥さんが犬を飼うことを許さないため、他所に預けておいて頻繁に会いに行っている。1年ほど経ったある日、別の友達に預ける。しかし、犬は賢こく、バスに乗って帰ってきてしまう。これにアレクサンドルは感激し、なんとか誤魔化して飼おうとするが、奥さんに見つかってしまう。奥さんは渋々飼うことを許すが、犬の悪戯に手を焼くことになる。

そんなある日、奥さんと義父母が車で親戚の葬式に行く途中、事故を起こし、三人

とも逝ってしまう。かくして快適なぐうたら人生が全開となる。自らはベットから出ず、犬にバスケットをくわえさせて買い物に行かせ、彼に倣^{なら}って村に怠け者が増えてくる。犬が食料品店から閉め出されると、犬は“ここ掘れワンワン”とばかりジャガイモを畑からゲットし、鶏小屋から卵をくわえてきたり、五月蠅^{うるさ}い村人達を追い返してしてくれる。

そんな折、食料品店で働くセクシーで怠け者の可愛い女の子アガタ(マルレーヌ・ジョベール)が、彼の怠け者ぶりに興味をもつ。一方、村人や友達サンガンは、彼を家の外に出し、犬と遊ばせようとする。しかし、外に出ても魚釣りやビリヤード三昧の生活を送るようになる。アガタと会っているうちに、二人は惹かれ合っていく。さらに、彼が思ったより広い農地を持っていることが判り、彼女はプロポーズを願うようになり、彼の農地をうまく経営して儲けようとの下心も育ってくる。

結婚式の日を迎える。教会の祭壇の前に二人が並んで式が執り行われ、神父が「この女を、汝の妻としますか」と言って返事を待った時、一瞬躊躇し、思わず「いやだ」

と言ってしまう。そして教会を出て犬と共に走り出す。花嫁姿のアガタと村人たちは追いかけるが、畑の中の案山子^{かかし}に扮した彼は、追っ手をまき、どこへともなく立ち去り、愛犬と一緒に嬉しそうにのんびり。エスプリの利いた洒落た映画であった。

65 素晴らしき日曜日

1947年、邦画。演出：黒澤明。

東京には太平洋戦争の傷跡が残り、夕食はいつもの通りジャガイモにみそ汁であり、お手伝いさんを女中と言い、デートのことをランデヴー、カップルをアヴェックと言った時代のこと。東宝に労働争議があり、有名俳優に代わりカップルとして雄造に沼崎勲、昌子に中北千枝子を起用する。映画では、ふたりは日曜日にデートをする(写真3)。まず住宅展示場を見学するが、高嶺の花。子供の野球に飛び入りすると、雄造の打ったボールが饅頭屋さんに飛び込み、損害賠償を払わされる。戦友が経営す



写真3 『恋と馬鈴薯』から着想した

るキャバレーを訪ねてみると、物乞いと勘違いされて相手にしてもらえない。日比谷公会堂に「未成交響楽」を聴きに行けば、切符を買い占めたダフ屋に抗議して袋叩きにされてしまう。

雄造は昌子を自分の下宿に連れて行き、彼女の体を求める。怖れた昌子は部屋を飛び出すが、やがて観念したように戻ってきて、泣きながらレインコートを脱ぎはじめる。心を打たれた雄造は「馬鹿だな、いいんだよ」と、昌子をいたわり詫げる。

雨が止み、日比谷野外音楽堂に足を運び、雄造はオーケストラの指揮の真似をして昌子に「未成交響楽」を聞かせようとする。しかし、いくらタクトを振っても曲は聞えない。すると昌子はステージに駆け上がり、(映画の客席に向かって)叫ぶ。「皆さん、お願いします！どうか拍手をしてやって下さい！」。この言葉に励まされた雄造が再びタクトを振ると、ついに『未成交響楽』が高らかに鳴り響く……。

黒澤明によると、D・W・グリフィス監督の無声映画『素晴らしい哉人生(恋と馬鈴薯)』から着想を得たという。即ち、若いポーランド人のカップルが住宅難で結婚できない。そこで空き地を借りてジャガイモを植え、その収穫で小さい家を立てようとする。やがて収穫の時期となりジャガイモを運んでくると暴漢に襲われてすっかり盗まれてしまう。青年は絶望するが、恋人は彼を励まして再起させる。というストーリーである。